

「伝統と文化」

日本の伝統文化は世界の誇りです

=右翼ってなに?=

1月2日に皇居の一般参賀に行ったり、8月15日に靖国神社に行ったりすると、右翼の街宣車が我が物顔で道路に（違法）駐車しています。

国旗を掲げたり、「北方領土を返せ」など言っていることは分かるような気がするのですが、彼らのやっていることを見ると違和感を感じます。

私も保守の運動をしていると、"右翼"などと言われることがあります。一緒にしてくれるな、と言いたいところですが、じゃあ、彼らとの違いは何かと言われると明確に答えられませんでした。

先日、「渡部昇一の昭和史」（ワック）という本を読み返していました、「天皇を戴く社会主義者」というところに、こんなことが書いてありました。

«戦前の日本において、共産主義はほとんど影響力を持てなかった。その最大の原因は、「天皇制の廃止」を掲げたことにある。このスローガンが、共産主義に対する国民の恐怖感を生んだからである。

こうした左翼の共産主義、社会主義者の代わりに日本で大きく力を持ったのは、"右翼の社会主義者"たちの存在である。彼らは天皇という名前を使って、日本を社会主義の国家にしようと考えたのである。

この右翼社会主義思想を唱えた人に北一輝がいるが、彼の主著「國体論及び純正社会主義」が出たとき、日本の左翼思想家たちはもろ手を挙げて、その主張に賛同したほどである。

昭和6年、右翼が結集して「全日本愛國者共同闘争協議会」という連合体を作った時に決議された綱領を見れば「右翼社会主義」の思想がよく分かる。

1. われらは亡国政治を覆滅し、天皇親政の実現を期す。

（※天皇親政とは聞こえがいいが、結局は天皇の権威を借りて独裁政治を実現すべきということである）

2. われらは産業大権の確立により資本主義の打倒を期す。

（※産業大権を確立すべきとは、つまり資本主義に基づいた

平成30年11月 改訂版第8号（通版30号）



編集・発行：

教育を正す東葛市民の会

会長： 岩渕宣仁

事務局： 永井紀雄

電話： 047-343-1936

私的財産権を大幅に制限し、土地を含むすべての生産手段を国有にせよというのだ）

3. われらは国内の階級対立を克服し、国威の世界的発揚を期す（※左翼も右翼も同じ社会主義であることはここで「階級対立」という概念が持ち出されていることでも分かる）

戦後の歴史教育では彼らのことを「国家主義者」とか「軍国主義者」というような名前で呼んでいるが、それでは本質は分からぬ。彼らは、あくまでも右翼の社会主義者なのである。»

（注：一部表現を要約したところがあります）

ということで、我々の活動はこのような社会主義を目指しているものでもないことをこの際確認しておきたいと思います。（仁）

講演会のお知らせ

来年1月26日(土)午後2時より

パレット柏にて開催

演題：「現在の沖縄の危機」について

講師：仲村覚先生

略歴：沖縄県出身。日本沖縄政策研究フォーラム主宰

「ニュールンベルク裁判」(DVD)

を観て考えたこと。

かなり昔にTVで「ニュールンベルク裁判」の映画を観ましたが、内容は忘れてしまったので今回DVDを借りて見てみました。（主演、スペンサー・トレイシー。バート・ランカスター。マーネ・ディートリッヒ等々）

1945年ナチスの戦犯に対して裁判が行われたのですが、その中に元司法大臣ヤニングの裁判も始まり、他の被告達が無罪を主張する中ヤニングだけは有罪を認めていました。そして有罪を認めるヤニングに対して弁護人はヤニングを助ける為、説得しに行き面会で弁護人はヤニングに「アメリカの支配を望むのです

か？原爆をおとした国ですよ。女や子供まで何十万人も焼き殺した国ですよ。」と言うセリフの場面がありました。

たしかにナチスが犯したホロコーストなどは目を覆うばかりの惨たらしさや残虐さはありました、でも一方で戦勝国側の非道さに対してはどうなのか？

戦勝国だという事で一切の罪に問われませんでしたね。

広島、長崎への原爆、東京下町に一晩で10万人を焼き殺した3月10日の大空襲、ベルリンに入ったソ連軍の婦女子達への恐ろしい暴行の数々（満洲も同じ）もうやりたい放題としか思えない暴虐さですよ。

それどころか自分達のやった非道な行為を戦勝国であることをいいことにドイツのせいにしていましたね。例えばポーランド将校2万人の遺体がカチンの森で見つかった「カチンの森」事件はゴルバチョフが認めるまでずっとドイツのせいにされてきました。

今更ですが、この映画を観て戦勝国だからと自分達のことは棚に上げて敗戦国を裁く資格があるのでしょうか？戦勝国だからといって全てが許されるのでしょうか？とつくづくと考えてしまいました。

唯一、救いだったのは日本軍がアジアの植民地から白人を追い出してアジアの人達に自信をつけ、それが戦後植民地からの解放、独立に向かったこと。

日本を怒らせて追い詰めて戦争に向かわせたアメリカもそこは誤算だったでしょうね。（葉）

「図書館で、今何が起こってる？」

の前号のつづきは、誠に申し訳ありませんが、紙面の都合上改めて掲載させて頂きます。

第11代垂仁天皇に始まる伝統が今も続いています

（その2）「由貴夕大御饌」を奉拝して

前号からのつづき

前号で、「由貴夕大御饌」の奉拝までの経緯をお話しましたが、今回は、「由貴夕大御饌」の奉拝についてお話ししたいと思います。

昨年10月15日夜9時30分過ぎ、外宮参道火除橋前に集合。

境内では、一切の発声・発音は無用との厳重注意を受け、断続的に降る霧雨の中、月明かりもない真っ暗な参道を進んで行きました。周囲の静寂とは対照的に我々の玉砂利を踏む足音だけが殊更大きく聞こえ、何とも不思議な気持ちになりました。

どれほど進んだかは定かではありませんが、ある建物の軒下に

案内され、ふと遠く右前方を眺めると、ゆらゆらと明るくなったり、暗くなったりする松明の明かりの中で、十人ほどの白装束の姿が、明るいとぼんやりと見え、暗くなるとふわっとした白い綿のようにも見えたりする、何とも言えない幻想的で不思議な雰囲気の中、突然、後方から、ドーン、ドーンと太鼓の音が響き渡り、それがだんだん近づき、私達の横を菅笠を被った白装束がその太鼓を打ち鳴らし通り過ぎて行きました。

しばらくして、大きな警蹕^{けいひつ}が前方から聞こえると、今度は後方から、玉砂利を踏む大勢の足音が聞こえ、だんだんと近づいてきました。その行列は、提灯の明かりを頼りに白い斎服に緋色の袴を召された祭主を中心に、白い斎服の神職約三十人の行列で、淨闘の中、おぼろげに浮かび上がって見えてきました。

そして、白装束の十人ほどが待つ斎場に参進され、祝詞を奏上されるかすかな声と松明でゆらゆらと揺れる祭祀の所作を隠げに感じることが出来ました。

そして、また、大きな警蹕が聞こえると、列を整え、祭主の行列は御正宮の方向へ参進されました。

しばらくして、私達は参道をさらに進み、豊受大神宮御正宮の御垣内（外垣と内垣の間）に参進しました。耳を凝らしますと御正殿の方向から、かすかに祝詞の臺上や厳かな調べなどが漏れ聞こえ、中重^{なかのえ}（前庭）では神職がゆらゆらと揺れる松明の明かりを絶やさぬよう守っている。これらの佇まいが何とも幻想的で穏やかでありながら、厳肅な雰囲気を醸し出していました。

そして、私達は、夜11時半頃奉拝を終了となりましたが、この祭祀は、日を越えて16日の未明まで続けられ、実際の「由貴夕大御饌」がお供えされるのは、日付が変わった後ということでした。

この祭祀の一端を奉拝することが出来たことにより、古代から、この国の統治者は、他の国と比べれば暴力的ではなく「自然に対する畏怖の念」を想像以上に抱き続けておられることを感じさせて頂くことが出来ました。

「皇室」の重要祭祀である「新嘗祭」・「神嘗祭」などの祭祀が、深夜に人知れず行われなければならないと信じられ、二千年の間、今日に至るまで続けられていることの意義の一端を理解させて頂いたような気がします。

この深夜に執り行われる「由貴夕大御饌」について、この日の午前中に行われた「初穂曳」に参加している地元の人や、お土産屋さん、お寿司屋さん、ホテルの人など7,8人に聞きましたが、誰も知っている人はいませんでした。（才）